

## 研修成果報告書

今回、私は島根県隠岐諸島に属する島前へ研修に行きました。島前は、有人島である中ノ島、西ノ島、知夫里島と、無人島である松島などによって構成される群島のことです。そこで、社会福祉法人 シオンの園が経営するシオン保育園を訪れ、沢山のことを教えていただきました。シオン保育園は、日本キリスト教団隠岐教会に、黒木地区から保育所を設置するよう依頼があり、開設された保育園です。まず、施設の現在の児童の数は46名で、職員が14名います。先生1人に対して0歳の児童が3人、1、2歳の児童が6人、3歳以上が30名と法律で定まっており、人手は足りています。しかし、待機児童もいて、入りたいと言っている人が3人いるそうです。つまり、声に出していないだけで我慢している人はもっといるだろうという話でした。西ノ島には保育施設が町立と私立と2つあり、どちらも規模は同程度なので、もう一方でも同じ問題が起きていることでしょう。待機児童の問題は、人口を多々抱えている都市部での問題だと考えていたので、離島でも発生する問題であるということが驚きでした。加えて、少子化の時代であるのに、なぜ待機児童が生まれるのかという矛盾を感じたので調査したところ、女性の社会進出によって、共働きやシングルマザー、シングルファザーが増えたことが原因で、児童の絶対数は減っているが、保育園に入る児童が増え過ぎたからだと判明しました。この問題を解消するためには、国が経営する保育施設を増やすだけでなく、共働き世帯やシングルマザー、シングルファザーが自分の子どもを自分で育てることができるような給付金がある必要があると感じました。保育の現場においての大変なことは、親御さんとの関係作りです。保育は子どもとの関わりだけだと考えがちですが、必然的に大人との関わりも多いので、ギャップが難しいのだと考えました。運営においては、賃金が安いことです。賃金の低さは福祉業界全体で早急に解決が叫ばれる問題であり、保育施設も例に漏れないのだと改めて考えました。教えていただいた中で、島ならではの感じた点は、災害対策として実施する月に1回の避難訓練で、津波対策を重点的に行うことや、散歩の中で海遊びや、山遊びを取り入れること、親の仕事は漁師の割合が高いことです。さらに、シオン保育園を利用する人の中には、田舎で育てたかったからという理由を持っている人もいるようで、そのような人はIターンしてくるそうです。田舎の良さは、地域の方々との交流が多いことや、それによって幼い頃から他人と関わる場面が多いことで、コミュニケーション能力が鍛えられることでしょう。他人との関わりが多いとは言え、もちろん安全性は万全にしており、島の見知らぬ人が園を訪れた際も、園長が話をし、正しい理由があれば受け入れますが、危ない人は絶対に入れません。ただ、コミュニティの狭さ故に、知らない人はほとんどいないそうです。話を伺って印象的だったのは、命を預かっているという責任感を強く持っていること、こんなに笑う仕事は他に無いだろうと言っていたことです。もちろん他の園と提供するサービスを差別化することも経営上大切ですが、何より大切なのは職員が楽しんでいることだと痛感しました。将来自分の子どもを保育施設に預ける時、どのような保育園に預けたいかを考えると当然のことですが、忘れられがちなこ

とでもあるので、改めて周知されるべきだと考えます。

他には、西ノ島中学校へ行き、島の中学生とも交流をしました。島前には大学が無いため、島の中で大学生と関わる機会も無いそうです。この話を聞いて、とても驚きました。よく考えれば、大学が無い地域もあるのは当然ですが、大学生がいることが当たり前の環境でずっと育ってきたために、想像したことすらありませんでした。大学生とすれ違うことすら滅多に無いような地域があるという事実を、リアリティを持って知ったのは初めてのことで、強烈なインパクトがありました。また、そのような環境の中学生が、私たち大学生への質問を考えるというのは興味深くもありますが、難しいことだと考えました。しかし、中学生はそのような私の不安を良い意味で裏切ってくれ、多くの質問を投げかけてくれました。中学生との交流を通して感じたことは、各々独自の興味の種は沢山持っており、それを表現する力も持っているが、それを活かす方法は知らないということです。興味が自己や他者との共有で完結しており、それをどう活用するかが苦手で、この原因は年齢上当然のことですが、社会経験の不足はもちろん、島特有のコミュニティの狭さにあると考えます。コミュニティの狭さは必ずしも悪ではありません。より密度の高い関係性を築くことが可能になりますし、その関係性はコミュニティに属する人の意思と関係無く強固になるでしょう。しかし、これが原因で自分の活用方法が閉鎖的な環境で完結してしまい、コミュニティ外の可能性に光が当たらなくなっているのです。多くの選択肢を持っているはずの子どもが、その内のいくつかを見落としてしまうのはひどく勿体無いことだと考えます。だからこそ、今回の中学生と大学生の交流は大変有意義なものであったはずです。中学生にとって普段滅多に関わらない年代の人と話すことは、おそらく刺激的で新鮮なものであったでしょうし、上述のように、大学生も考えさせられることや、学ぶことが多々ありました。中学生が同じことを思っていてくれたら良いと思いつつ、この交流を私も今後の人生に活用していこうと考えます。

上記の時間以外には、島前の様々な人と関わることができました。私達が宿泊していた時、島内では、キンニャモニャ祭が開催されており、私達も参加させていただきました。キンニャモニャ祭りとは海士町の民謡「キンニャモニャ」を踊る、町最大のイベントです。町最大のイベントと言うだけあって、その日は会場に多くの島民が集まっていました。島外の人である私達にも優しく丁寧に接して下さり、島民の人柄を感じることができました。例えば、「キンニャモニャ」の踊り方が何も分からない私達に、わざわざ時間を割いて一から十まで教えて下さったり、沿岸で釣りをしていた際、見ず知らずの釣りが趣味だと思われるご老人が、私達に高価な釣り具を貸して下さり、その上、私達の夕食にと、釣れた魚を全てくださることもありました。また、島民との関わりの中で印象的だったのは、島内にほとんど知らない人がいないということです。たまたま乗車したタクシーの運転手が、島出身の私達の同級生を幼い頃から知っていたり、上記のシオン保育園の保育士が、私達に釣り具のレンタルを行ってくれた店の娘だったり、関係性の密度の高さが明確に表れていました。中学生との交流において、コミュニティの狭さ故のデメリットも挙げましたが、それ以上にメリット

の方が大きいのではないかと実体験で学びました。

このように、実際に自分の目と耳で体験しなければ分からないことが多々あると、改めて考えさせられる研修でした。現在はインターネットが普及し、自分の興味があることや、疑問に感じたことを手軽に知ることが可能な世の中ではありますが、それによって得ることができるのは、文字や写真などの二次的な情報に限ります。これからの生活においても、関心があることは、自分の身体を使って学ぼうと考えます。